

## ニコライ・ネフスキーと宮古諸島

今年の日露戦争終結から百年目。戦争時、ロシアでは多くの少年が大国に挑む東洋の小国に関心を持ったという。ボルガ河畔で育ったニコライ・ネフスキーも、その一人のようだ。ペテルブルグ大学で日本語を学び、1915年、日本に留学。言語・民俗学の研究資料を集めながら日本各地を歩いたが、20年代には沖縄の宮古諸島の調査に集中し、数々の論文を発表した。しかし、29年にソ連に帰国した彼は、8年後、スターリンの粛清で銃殺され、持ち帰った資料や続けた研究は闇に葬られた。それらがソ連崩壊の頃から陽の目を見るようになった。

その一つ、論文「宮古の病気治療」(執筆年不明『ペテルブルグの東洋学』1996 ロシア語)には、動植物による治療が記録されていて興味深い。例えば、淋病にはピワの葉に中国茶と氷砂糖を加えて煎じたものが用いられた。「八重山の老婆の小便草」という、いかにも効きそうな名の植物の汁は、発熱した時の飲み薬。その残り滓は体に張って熱冷ましに。麻疹には蕤の葉を煎じた。そして、万能薬はヤギの生血だ。ただし、嫌がって飲むと効き目がない。

ネフスキーは早い時期から、古(いにしえ)の人々が動植物の特別な力を信じていたことに注目した。来日後の初期の論文「農業に関する血液の土俗」(『土俗と伝説』1918)には、古の人々が田を作る時、稲種を水ではなく、動物の血に潤した例が『播磨風土記』から引用され、伐採されて血を流す巨樹の言い伝えなども記されている。彼は、これらの例に、血は靈魂を運び、植物は靈魂を宿すと考えた古の人々の思想、つまり、アニミズムを見ている。

彼は古い文献にだけでなく、現存するアニミズムの片鱗を探し求め、論文の中で「(このような例が)今迄日本の片田舎に残存してゐるかどうか。読者諸君の御教へを願ひたい」と呼びかけた。これに対して「ねふすきい君の論文を読んで」と自らの論文で応じたのが沖縄出身の研究者、末吉安恭だ。その論文「琉球に於ける血液の土俗」(『土俗と伝説』1919)で、彼は沖縄本島に於けるヤギの生血を飲む風習などを紹介した。ネフスキーの「宮古の病気治療」には本島にもある治療法として、この例が末吉の名と論文名と共に引用されている。

末吉の論文は、ネフスキーが沖縄に民俗学的関心を抱いたきっかけの一つだろう。だが、その沖縄でも、当時、未だ研究者の興味をほとんど引いていなかった宮古諸島にネフスキーが注目したのは何故か。その理由の一つに、ペテルブルグ大学の一年先輩ポリワノフの影響を挙げることができるだろう。この天才的言語学者はロシアに居ながら、文献を基に琉球語の音韻の特殊性を指摘する『日琉比較音韻論』(1914)を書き上げてしまった。この本に、宮古方言が日本語の古い音を多く残していることが、幾分か触れられているのだ。

古の音が残っている島には、古の風習が生きているに違いない！1922年、ネフスキーは初めて宮古諸島に渡った。島人が虹を「ティンバヴ(天の蛇)」と言うことに驚き、「アーク(アヤゴ)」という昔から伝わる美しい歌謡に感動した。彼は26年、28年にも訪れ、島中を歩き、方言や歌や風習を聞き集めた。島人が医者より信頼する霊能者の呪い(まじない)も記録したかったが、当時は霊能者の活動が禁じられていたので会えなかった。

そこで、彼は島人が唱える呪いを集めた。以下は子供がお腹を痛めた時、友達が声を合わせて歌う呪い。

「アガイタンディ ヨーヌ(あらまあ)、バタヌドゥ ヤム(腹が痛い!) クース ファーイ(唐辛子を食べた)、マサリードゥ ヤム(もっと痛い)、トゥナカ ファーイ(卵を食べた)、ヌア<sub>レ</sub>ドゥ シー(直った)、ガキ バタガマ(餓鬼のように卑しい腹め!)(注「<sub>レ</sub>」は宮古方言特有の音)

ネフスキーは、大学時代に習得した国際音声記号と見事な日本語で宮古方言を記録してくれた。おかげで八十余年の年月を超えて、呪いの不思議な響が聞こえてくるようだ。ひょっとしたら、ネフスキーを北の国から南の島へ連れてきたのも、島人の呪いだったのかもしれない。そのネフスキー、昨今の沖縄ブームを知ったら、南の海の色をした瞳を丸くして驚くだろう。

(フリーライター・ロシア研究 田中水絵・たなかみづえ)